

京都グローバリゼーション研究所通信

第3号 2008年3月

京都グローバリゼーション研究所

Kyoto Institute on Globalization (KIOG)

主宰 佐々木 建

〒603-8151 京都市北区小山下総町 37

TEL:075-451-8303 FAX:075-451-3682

E-Mail:kitanihito@aol.com

<http://www.focusglobal.org/>

<http://www.focusglobal.org/kitanihito/>



目次

時代の課題

- 危機に瀕しているのは農村だけではないー「限界集落」論議に考えるー 1
「限界」とは「消滅」「衰微」のこと・・・危機に瀕しているのは農村だけではない
・・・グローバル資本主義に屈服するな・・・「豊かさ」の再吟味が必要だ

評論

- 地球環境危機と「先進国責任」 6
リオ、ヨハネスブルクの理念を再確認する・・・先進国責任を問う・・・温暖化対
策をいまの政府に委ねてよいものか・・・地球市民の視点に立つことが必要だ

随想

- 果てからの声 17
囁きでも力になる・・・8月15日のトラウマ・・・誇りを持ってぬまち・・・バラック

短信

- 課題の多さに追いつかぬ筆力・・・現状を的確に表現する用語をめざせ・・・私事 26

時代の課題

危機に瀕しているのは農村だけではない

－「限界集落」論議に考える－

1 「限界」とは「消滅」「衰微」のこと

「限界集落」という言葉が流行している。「限界集落の活性化」「限界集落の交流」「限界集落を条例で支援」「限界集落へ若者たちの支援」等々、新聞にもテレビにもこの種の見出しが躍る。この言葉の意味を理解している読者はどれくらいいるのだろうか。新聞を読みテレビの解説を見る機会の多い人にも理解しがたい用語ではないかと思う。

この用語で一体どのような状態を表現しようというのだろうか。もともとは長野大学教授大野晃氏の論文に始まり、65歳以上の住民が50パーセントを占め、共同体としての機能が衰え、やがて消滅に向かう集落を言うのだそうだ。しかし、現実の農山村集落を観察すると、この問題に素人の私にさえ、そこからは消滅寸前であえぎ、もう維持するのが限界だという嘆きと叫びが聞こえてくる。

限界どころではない。超高齢化と人口減少は加速度的に進み、病院、公共交通等も衰微し、商店も老齢により店を閉め、わずかばかりの畑も猿や鹿、猪等の野生動物に食い

荒らされて消滅寸前の集落が増えている。これが問題なのだ。高齢者の比率からみて、あと十年もすれば高齢者のかなりの部分が亡くなるから、事態はさらに深刻になる。このままでは放置されて廃墟と化した集落の風景が方々に観察されるようになるだろう。

このような現実を見聞すると、報じられている施策など効果があると考え人はおそらくほとんどいないだろう。

ジャーナリストや社会学者たちはこんないい加減な用語ではなく、もっと現実を反映した表現を選んで問題の深刻さを示すべきではないのか。向き合っている現実は「限界」ではなく「消滅」そのものなのだから。

2 危機に瀕しているのは農村だけではない

消滅の危機にさらされているのは農村地帯の集落だけではない。漁業や林業を営む集落も同様だ。地方都市も立ち枯れ現象を起こしている。大都市でも人口減少の影響は多くの地域で観察される。私の住む京都市の中心部もその例に漏れない。高齢化は急速に進み、独居老人が増え、空き家が目立ち始める。空き家はそのうちに不動産屋の手に渡り、更地にされ、売り土地の看板が目立ち始める。かつてバブル最盛期に京都市内でも地上げによって更地が増え、町並みが破壊された。今では超高齢化の流れがまちを破壊している。

祭りが消えかかっているのは農村だけではない。都市部でも同じである。京都の夏の行事に地蔵盆がある。辻々に町内安全を願ってお地蔵様が祠に祀られている。その前で

町内の子どもたちのための祭りが行われる。ところが町内から主役の子どもが消え、祭りを支える大人たちの高齢化が進み、維持するための経済的な負担も重くのしかかる。そろそろ止めようかと、方々でささやかれはじめている。

シャッターを下ろしたまま朽ち果てる商店や住宅の光景、自然や景観の荒廃、地場産業の衰退ぶりを観察すると、国土そのものがもう限界だと悲鳴を上げているように聞こえる。地場産業の衰退は伝統的技能の消滅を早めている。祭りの担い手がいなくなると、伝統の維持も風前の灯である。このままでは日本文化そのものが衰微しかねない。というよりも、すでにもう後戻りできない地点にまで到達しているのかもしれない。

3 グローバル資本主義に屈服するな

人口減少と高齢化が急速に進む一方で、関東、中京、関西の大都市圏への人口集中率はすでに 50 パーセントを超えている。このようにいびつな構造を放置しておいて、「限界」集落や「限界」都市の増殖を阻止し、救済することなどできるはずがない。

都市型産業、多国籍企業だけが繁栄し、GDP は成長する。しかし、国土が荒廃しても豊かになったと言えるのか。それでも美しいといえるのか。食料の圧倒的部分を海外に依存して、国内の農業も漁業も衰微する。これで果たして豊かであるといえるのか。

なぜこうなるのか。生産と管理の制度の巨大都市集中が無制約に進んでいることに原因がある。グローバル資本主

義は先進国自身が孵化させ、育て上げたものだ。挙げ句の果てに自身の足下を喰いあさる、手に負えない怪物に肥大化させてしまったのだ。この資本主義が作りだしたグローバル市場で競争を勝ち抜くためには、経済的効率を最優先する立地を求め多国籍企業として海外に展開する一方で、国内でも大都市圏に最大限に資源と労働力を集中させる。政府の産業政策もこれを積極的に後押ししている。地方と第一次産業の衰退はいわばそのメダルの裏側なのだ。

グローバル資本主義は地球上の至るところで産業と人口の都市集中を押し進め、地方を衰退させる。今この国で急速に広まっている地方の衰退は、いわゆる新興国、途上国で広まる都市集中と地方の危機とまったく同じ根からでている現象なのだ。

4 「豊かさ」の再吟味が必要だ

人口減少・高齢化、人口の巨大都市集中の奔流はもう押しとどめようがないように見える。並大抵の努力では無理であろう。覚悟して取りかかるというのなら、まず「豊かさ」とは何かを再吟味することがどうしても必要になる。経済効率の追求だけでは人間は豊になれないことを明らかにすべきだ。地球環境を犠牲にして果たして豊かになったと言えるのか。価格が安いからといって「食の安全」を自ら放棄してよいものか。自動車を手放したくなくて、農産物価格の高騰を許してよいものか。先祖たちが守り育ててきた景観を破壊してまでコンクリートの中で生きることが果たして豊であるといえるのか。いま真剣に考えるとき

である。

私たちが視点を新しい豊かさの方向へ大転換出来るならば、大都市圏への人口集中を抑制し、バランスのとれた国土利用を進める構想を練り上げることは簡単なことだ。ただただ GDP 成長率を押し上げるために大都市圏への産業の集積を促進するような産業政策、交通政策を止めなければならない。出来るだけ早く大胆に舵を切ることが求められている。



評論

地球環境危機と「先進国責任」

1 リオ、ヨハネスブルクの理念を再確認する

21世紀は「環境の世紀」になると多くの人が期待を込めて論じ、来るべき時代は地球環境危機に自覚して解決に立ち向かう世紀、提示された解決策が実行に移される時期になると考えた。私もその一人である。

ところが事態は楽観的理想主義者の予想に反してまったく反対の方向に進んでいる。地球に加えられる資源収奪と汚染の負荷はますます深刻になり、それを抑制して癒すすべはいまだに発見されていない。それどころか坂道を転げ落ちるように破滅に向かって加速しているようにみえる。

地球環境危機を克服する道は理想的には明快である。人類として連帯して、大転換を目指すことである。その理念を実現する地球大的構想を議論し、その実現に向けてただちに着手したらよいのである。特に次の点の実現が切に望まれる。

第1に、戦争や地域紛争の拡大を阻止する方向に転換することである。戦争は人類をはじめとするすべての生物種の生命を損ない、自然を破壊し、資源を浪費する。戦争に

はエコロジーも省エネルギーも資源節約もまったく関係ない。殺戮するのに、温暖化ガス削減やエネルギー効率を考慮に入れる司令官はいるだろうか。相手の陣地に打撃を与えるのに、景観や遺跡、歴史的建造物を注意深く除いて攻撃対象を決めることなどあり得ない。地球環境問題の解決のために求められているのは、何よりもまず恒久平和を実現することである。

第2に、恒久平和の実現に限らず、あらゆる地球的課題、たとえば人口増、貧困、資源枯渇、全生物種に関わる生存危機等に対しても積極的に取り組む姿勢を早急に確立することである。地球環境危機とは地球そのものの危機と不可分に結びついて展開している。むしろ地球危機と表現した方が正確かもしれない。人間の生存条件が悪化するだけではない。あらゆる生命の生存条件が悪化しているからである。地球が提供する資源を搾れるだけ搾り尽くして、回復不能なまでに地球を汚し続けている。かけがえのない地球の危機という他に表現すべき言葉を見いだせない。「エコ」という呪文を唱え、「エコ袋」をファッションとして持ち歩く程度の姿勢では、悲鳴を上げる地球にとってさしたる助けにはならないことを知るべきである。

第3に、人類を含むすべての生物種の生存の危機に対処するためには、何よりも生産と生活の仕組みを革命的に改革しなければならない。先進国が実現した資源浪費型生産・生活様式の大転換に着手することなしに資源消費を大幅に削減することなどありえないし、それでは地球に対する負荷は減らない。しかも今、その様式が中国、インドを中心とする新興国群に急速に広まっている。その推進者であり続けた先進国が改革の模範を示さぬ限り、新興国は従わ

ないし、地球環境問題の解決の展望は見えてこない。

私の主張は目新しいものでもなんでもない。2002年9月、リオの10年後に開催されたヨハネスブルク・サミットの「宣言」に明確に書きしるされていることのいくつかを、私の言葉で言い直しただけにすぎない(注1)。リオ・サミットにいたる地球大構想作成への国際世論のエネルギーの再評価を踏まえて、あらためて地球危機に対応する大構想と戦略を作り上げるためにに叢智を結集すべき時ではないか。

(注1) 宣言全文は次を参照。地球環境法研究会編『地球環境条約集』(第4版)
中央法規出版株式会社、2003年6月

2 先進国責任を問う

これらの国際的に合意された理念に照らしてみると、先進国指導者は地球的な視野に立ってこれらの地球的課題の解決に立ち向かっているとは到底考えられない。地球環境問題の解決には、何よりもまず先進国の側で解決への責任が自覚されなければならない。

「先進国責任」とは何か。

第1に、環境破壊は、一握りの先進国が地球上の資源を独占し、それを浪費してきた結果であることを確認し、その浪費に見合って資源消費を削減する義務を負うことである。それはエネルギー資源に止まらず、生物資源も含むすべての資源に関わることである。

第2に、先進国責任は先進国市民の環境意識と行動についても当てはまる。サイクロンで甚大な被害を被ったバングラデシュや高潮で水没の危機にさらされるツバルの人びとの映像を見て同情し、自分たちもいずれはこうなるかもしれないと恐怖の念にとらわれながらも、どのような対応をしたらよいのか迷い躊躇している現状を、打ち破らなければならない。

自分の利益だけを考え、後は野となれ山となれとする考えが蔓延しているのではないか。市民は政府と経済界が展開する国益擁護の態度を共有してはならない。

市民にこそ地球市民的視野が求められ、またそのように行動できる。国益擁護の立場を捨てては、政府は存続できない。企業は利益を上げ、株主に配当をもたらさなければ存続し得ない。これに対して市民は自分たちの子孫、将来世代の「豊かさ」を率直に考える。国会議員は次回の当選を可能にするために走り回る。彼らの時間の基準はせいぜいのところ彼らの任期にすぎない。経営者たちは次回株主総会までの1年間に責任を持つにすぎない。もちろん企業として中長期の計画が策定されはする。しかしそこには持続可能な社会に対する意志も貢献も示されることはない。それに対し、市民は最も長い基準で持続可能性を語るることができる。

地球環境問題の解決は、国益にとらわれることのない市民の活動なしにはあり得ない。市民の国境を越えた連帯なしにはあり得ない。これを地球民主主義と呼ぶことにしよう。私たちは国益のためではなく、政府に指示されるのではなく、自覚的に自分の子孫のために、ツバルの市民のために行動することが必要なのだ。

第3に、先進国が作り出した経済・生活システムの蔓延がいまの地球危機を作り出しているとするれば、先進国は地球に対する負荷を大幅に削減する新しいシステムの提示が求められている。個別の技術革新だけでは問題は解決しないのだ。

たとえば自動車について言うと、自動車1台あたり、走行キロあたりの燃費を改善しても、その率を上回って自動車台数と走行距離が伸びれば二酸化炭素の排出量は減らない。交通システムそのものの革新が求められているのだ。さらにいえば、自動車の普及は膨大な廃棄物、有害廃棄物を作り出す。自動車技術が作り出す環境問題は温暖化だけではない。燃費のよい自動車が先進国で普及しても燃費のよくない自動車が途上国、新興国で使用されたり、中古車として輸出されたりして、最終的に廃棄物処理能力のない途上国にゴミの山として残されることになる。

自動車に関わって考えなければならない重要問題がもう一つある。原油価格の高騰によってガソリン価格も急上昇している。ガソリン価格の維持と安定的供給は自動車文明を維持するためにの至上命題である。ガソリンが安いから自動車を乗り回せるのである。バイオエネルギー生産はそのための切り札である。しかし人間が食するものを犠牲にして車を走らせてよいものか。しかもグローバル資本主義のもとでは原料となる穀物が投機の対象となり、穀物価格は高騰する。自動車は生活を犠牲にして、とりわけ第三世界諸国の人びとの生活を犠牲にして世界中を走り回っている。

太陽光発電が再生可能なエネルギーの技術として注目されているが、これにも自動車と同じ問題がある。発展途上

国への省エネ支援の手段としても注目されている。しかし、これが資源採取から製造とメンテナンス、廃棄に至る全過程でどれだけの追加エネルギー消費と物質利用を必要とするのかについて正確に計算して見る必要がある。普及とともにどれほどの物質消費と追加エネルギー消費が増えるのか、地球への負荷がいわれているほどの削減をもたらすのか。廃棄物処理能力のない途上国にゴミの山を築くことになりはしないか。問題点は多い。電力消費を大幅に削減する生活様式を作り上げ普及することのほうが有効であり、先決問題ではないだろうか。

「先進国責任」は、私たちの日常の社会生活の倫理を考えてみれば当たり前のことである。一番汚してきた人びとが相応の負担を表明しなければ、地域社会の連帯は崩壊する。「先進国責任」とは、いうならば地球民主主義の根本原則であり、地球環境政策を考える上での出発点とも言うべき倫理的規範なのだ。

この規範も、私が最初に提起したものではない。地球環境問題の解決に向けて沸き立ち、1992年6月のリオサミットで頂点に達した国際世論の合意そのものなのである。

1992年6月12日に採択された「環境と開発に関するリオ宣言」原則7で、地球環境問題に対しては各国の連帯的な責任と協力を確認しながら、責任は国によって差異があり、とりわけ先進諸国には「彼らの社会が地球環境にもたらす圧力及び彼らが支配する技術及び財源の観点から、持続可能な開発の国際的な追求において負う責任」(注3)があると規定している。1992年5月に提示された気候変動枠組条約でもその視点が確認されている。先進国は率先してその責任を分担することが求められているのだ。

(注3) 引用は次によった。前掲『地球環境条約集』(第4版)。

3 温暖化対策をいまの政府に委ねてよいものか

地球環境問題の中でその解決が最も差し迫っているのは、急速に進む温暖化による気候変動である。気候変動はすでに誰もが実感できる水準に達している。ハリケーンや台風が多発、熱波の到来等の異常気象、生態系に見られる数々の異変に多くの人々が不安を抱きはじめている。地球温暖化は日常的な用語になり、多くの特集番組や特集記事で取り上げられるようになってきている。

それがもっぱら温室効果ガスの排出が原因であり、その大幅な削減なしには地球が危機的状況に陥ることについては、すでに科学者の間で一致がある。しかも気候変動に関する政府間パネル(IPCC)が昨年発表した第4次報告書で2050年までに温室効果ガスの50パーセント削減を提案した。2050年は目前に迫っている。今の若者たちなら十分に生きている時間である。その期間に化石燃料(石油、石炭、天然ガス等)消費を地球全体で半分にするとするのだ。しかも、先進国責任を自覚するなら、負担すべき削減量は50パーセントをはるかに上回る。先進国にとって温室効果ガスの大幅な削減は焦眉の課題となっている。

ところがである。このように不安が広がり、温暖化問題に真摯に取り組もうという国際世論が形成されるというのに、政治の次元で問題解決を展望できる新しい構想は登場しているといえるだろうか。先進国の指導者たちはかって

以上に地球環境問題への関わりを強調をしはじめていることは否定できない。しかし、リオ・サミットで示された合意や規範、あるいはその確定のために示された情熱に比べると、後退の印象はぬぐえない。

目に付くのは先進国の熾烈な主導権争いばかりである。温暖化対策を避けて通れなくなったという共通の認識は生まれてはいるが、自国の利権と成長政策に支障を来さぬように有利な枠組を作ることに腐心しているようにみえる。昨年 12 月にインドネシア・バリ島で開催された気候変動枠組条約第 13 回締約国会議（COP13）での論議にもその傾向が明確に示されている。

温暖化問題を無視してきたブッシュが方針転換したのは、将来のエネルギー市場再編だけでなく、予想される新しい削減枠組づくりで主導権を握りたいためであることは明らかである。日本政府も同じようなものだ。今年の洞爺湖サミットの議長国として「先進国責任」を自覚してリーダーシップを発揮するような構想を提示しているとは思われない。自国産業界の利益を優先して明確な数値目標を示すことに難色を示し、中国、インド等の新興国に相応の負担を求めることで合意を難しくしている。日本政府が問題解決への展望を示せるはずがない。

政府は 1970 - 80 年代の石油危機を日本が省エネ政策によって先進的に克服したことを過信し、その省エネ技術が世界をリードしていると喧伝し、取り組みの先頭を走っていると主張する。このように主張して根拠が明確に示されない官僚たちの作文が横行する。

政府と官僚たちは、彼らが言うように地球環境問題に積極的に対応しているといえるのか。1997 年 12 月の京都に

おける気候変動枠組条約締約国会議（COP3）の最終局面で議長国としての最終合意を目指す仲介を放棄して東京に帰ろうとした当時の環境庁長官が、妥協が成立したとの知らせで慌ててとって返したみっともない行動を覚えている人は多いだろう。あの醜態が日本政府の取り組みの真実を見事に示している。日本政府は京都に会場を提供し、議長を引き受けただけなのだ。その議長が最終局面でのとりまとめの仕事を放棄し、挙げ句の果に実現できもしない目標値を不承不承受け入れざるを得なくなったのだ。

しかも、その後の国内の環境政策はというと、クールビズや一時の温度の低下のために道路に水まきをするといった思いつきでしかないような官僚主導の愚行やあやしげな環境対策でお茶を濁してきたのである。これでは地球環境危機を克服する道筋をつけることは到底出来ないのではないか。

また、政府が枠組を決定し、国民に対する統制と指示によって問題の解決を図ろうとしていることも支持できない。政府の掲げる目標は国民の合意のもとにまとめ上げられたものではないし、国民の要請に基づくものでもない。将来世代に豊かな自然を残したいという、人間が本来持っている、また持つべき意識を反映しているものではない。

4 地球市民の視点に立つことが必要だ

私たちには地球市民として独自に地球的視野に立って課題を設定しなければならない。地球市民とは何か。この言葉はすでにこれまでに説明していることだが、あらためて

定義しておこう。自分の属する国の利益を優先する「国民」とは区別された、人類全体の利益を考え、国境を越えて連帯し行動する市民意識である。人間は国民意識とあわせて地球市民意識を持っているものだ。

地球市民として今求められていることは何か。

第1に、国益優先の政府提案に対する批判を強めることである。最低限でもリオ以来の国際世論の成果にてらして先進国政府の提案を批判することが必要だ。

政府の施策に公平性と透明性を求めていくことである。できることからやろうとか、「もったいない」論議が官僚に主導されて始まるとき、私はいつも戦時下の統制を思い出す。公正に見えながらも、統制や指示にはいつも不公正という裏がある。

第2に、学習によって知恵を獲得し、自発的に削減目標を立てることである。市民の側で地球に対する負荷を「ゆりかごからゆりかごまで」、つまり資源採取、製造、利用、リサイクルに至る全過程を正確に把握し、自分で計算できる能力を身につけることである。エネルギーやその他の資源の削減目標を掲げて政府の指示や統制によらずにそれを実行し、そのことが第三世界諸国の豊かさをどれだけ増やすかを計算しなければならない。

そのような社会的責任を自覚した個人と集団による自発的な環境対策を実施すること、それを基礎に地球的視野で多面的、多角的な民主主義のモザイクを形成すること、これが地球民主主義である。それは大国の支配による集権的な政治制度であってならない。私たちは政府の国益重視の削減目標の実現ために努力しているのではないのだ。地球民主主義のモザイクの形成を目指す行動でなければならな

い。

地球民主主義のモザイクが実現され、発展するなら、それは大国政治に対する十分な圧力ともなる。大国の資源支配を許し、資源浪費を垂れ流し続けるグローバル資本主義に対する対抗軸にもなり得る。

【付記】この論考は執筆中のワーキングペーパーの「まえがき」部分に加筆したもので、いわば予告編である。安倍政権に始まり福田政権に継承された「美しい地球 50」「ク - ルア - ス 50」の批判を展開して、この据わりの悪い作文の汚名を挽回をしたい。



随想

果てからの声

1 囁きでも力になる

人は過去を率直に語りたがらないものだ。数え切れないほど積もった悔悟の念がそうさせる。だから語るのは自己顕示欲の強い人、回想録を書きたがる人ばかりだ。手柄話や美化されたエピソードが続き、真実を表現するにはほど遠いものになる。特に高齢になるとその感が強くなる。私にとっても過去を語ることは高齢であることを自ら証しするようにも思われ、先を見て生きることがまだ自分に課せられているのだと信じていた。体験した過去を想像によって美化し、意図的にふくらますたぐいの「繰り言」に辟易としていたためか、証明のない過去を自ら語ることには消極的になっていた。

多くの人が私のような態度をとり続けるなら、書かれた資料の少ない民衆の姿は歴史には残らない。過去を書くことは先を見ることと同じように重要なことと、最近考えるようになってきている。

高齢に特有の語りと自ら蔑むこともないと思う。すでに70年あまりを生きて、その生の体験をふまえずに書くことなどできない筈だ。かつて文字通りの若者であった頃に

は、書くものは論理的でなければならず、その論理を通じて真理に迫ろうとする意欲で満ちていた。論理への憧れは今でも変わらない。それどころかますます強まっている。しかしその憧憬は今では70年を超える私の人生体験をふまえて実現されるものではないのだろうか。

それに加えて、最近の言論の状況、政治状況を見ていると、私のささやかな体験など簡単に否定され 歴史から抹殺されかねない状況が生まれている。この恐怖感が強くなったのは沖縄戦での島民の集団自決をめぐる最近の論調である。教科書から記述を抹殺した輩（やから）が抗議の声の高まりに抗しきれず、教科書の改訂を容認せざるを得なくなった。

ところがである。軍の命令でなく「関与」によって集団自決したのだという。あの時代に軍部が持っていた絶対的権威を経験した人ならだれでもこの表現の嘘に抗議するだろう。こんないい加減な歴史認識は到底認めるわけにはいかない。集団自決を指示した文書がなければ指示はなかったことになるというのか。体験した多数の民衆の声は真実ではないというのか。体験者が次々と逝ってしまう今、声を発することは重要なことだと思う。

このような流れに抗して、地の果てから、生の果てから私も声を発したいと思う。私の声はつぶやきか囁きか、それとも叫びか。嘆きか、それとも抗議か。その判断は読む人に委ねなければならない。

2 8月15日のトラウマ

2007年8月15日、数年ぶりの帰郷に旅立つ日、私は列車待ちの時間をつぶすために、新幹線京都駅の待合室に入った。普段はホームに出て待つのだが、あまりの蒸し暑さに冷房の効いた場所を求めたのだ。正午の時報とともに千鳥ヶ淵の戦没者慰霊式典の中継が映し出された。君が代の斉唱が始まった。この中継になると私はいつもテレビチャンネルを切り替えるか切ることになっている。待合室のテレビではそれもならず、私は外に出た。

戦時下に国民学校の生徒であった私にとって、天皇は現人神（あらひとがみ）であり、白馬に跨って全軍を統帥する大元帥であった。「神」が統帥するのだから敗北するはずはないと、教師たちにたたき込まれた。

サイパン、アッツ、キスカ等で「玉砕」が続き、沖縄で敗北して、子どもにも戦争の行方に不安を覚えはじめていた。ところが、教師たちから隣組指導者にいたるまで、本土決戦を叫んでいた。沖縄は日本ではなかったのかと疑念を持ったが、それを口に出すことはできなかった。米英が攻めてくれば、かならず「神風」が吹き、敵は水際で殲滅されるとも教え込まれた。

結局「神風」は吹かなかった。それどころか、私たち家族は7月15日の空襲で肉親をなくし全財産を失って絶望のどん底に突き落とされた。地方の小都市でこんな悲惨な状態に陥るとは想像だにしていなかった。私たちにとって戦争は、「玉音放送」のあった8月15日ではなく、絶望したこの日に実質上終わったのである。あの日は、私とわたしの家族にとって、機銃掃射に怯えることなく生きられる、

米軍の上陸作戦で命を落とすことないという、なにがしかの安堵感を得られた日にすぎなかったのではないか。

戦争を決断し遂行したもののたち、天皇の権威をあがめ、その名の下に小さな子どもまで戦争協力に駆り立てた輩（やから）がその責任を認めて謝罪することはなかった。戦争を遂行した輩は国民をまもることなどしなかった。国体を守り通すための盾として国民を利用したのだった。兵士として戦争にかり出されて死んだものたちには経済的補償が行われたが、貧窮のどん底に落ち込んだ私たちには何の補償もなかった。権力を握っていたものたちへの憎悪と不快な体験の記憶は、私の深層にすり込まれて消えることはない。8月15日を迎えると、この記憶は蘇る。しかも年を追う事に記憶は尖鋭になる。

そこまで執念深く記憶を反芻する必要はないのでは、そこまでこだわることもないのではと言う人もいる。私はかって軍国少年として育てられ、戦争で痛めつけられて生きた。いまや少数となった私の世代の体験が抹殺されつつあるこの時、記憶の反芻は繰り返されなければならない。

3 誇りを持ってぬまち

あまりにも落ちぶれ落剥したあのまちを「故郷」として紹介することには、私にもなにがしかの躊躇があった。このまちに住む友人の言うには、最近ではこのまち出身であることを隠す若者さえいるという。私の場合は社会的地位からそれほどまで劣等感を抱いてはいなかったので、新聞社その他のデータベース、自分の著書の略歴、自分のウェ

ブサイトにも公開している。

それでも出身はと聞かれると、相手の出方をうかがうかのように、まず「北海道です」と答えることが多い。「札幌ですか」と必ず問い返される。外国にいて日本人だというと「東京出身ですか」と問い返されるのと同じだ。「いや東の端ですよ」「ああ釧路ですか」「いや根室です」。ここから会話がわかる。「そんなまちありましたかね」「よくあんな田舎の高校を出て大学教授になれましたね」。訪ねたことのある人ならいつも次のように答える。「駅前に何もありませんね」「あのまちでも空襲がありましたからね。まちの財産のほとんどが燃えてしまったのですよ」というと、「あんな辺鄙なまちでも空襲があったのですか」といぶかしげな顔つきになる。この種の会話はこれまでに数え切れないほど、うんざりするほど繰り返されてきた。

自分が生まれ育ったまちに誇りを持ってないなど、さびしいことだ。そうはいっても、現在のあのまちに誇るべきことを見出すのは難しい。これは私の故郷に限ったことではない。誇りを失わせる状況が地方都市や農漁村で広がっている。まちや村や集落が消滅している。町村合併によって地図の上から歴史的に価値のある名称が消滅している。誇りの喪失に何の後ろめたさも感じない輩（やから）が推進したに違いない。

このまちの零落ぶりは私の家族の貧窮と重ね合わされているだけに、私にはなかなか説明できないことにもなったのである。「内地」の大学に進学して、貧窮生活とは正反対の方向に人生を踏み出した私にとって、この重ね合わされた零落は簡単に説明できることではなかった。あるときはアイヌの「族長」の子孫ではないかといわれ、ある時は

裕福な網元の子ではないかとも尋ねられた。髭を蓄えてからこの種の評価はますます勢いを増した。いつも私は否定も肯定もせずに笑っていた。「大学」という自称エリートが群がる世界に入った以上、このような誤解や評価もやむを得ないと思っていた。

4 バラック

今度の旅の目的は中学・高校時代の旧友に再会することであったが、ついでに私の戦後の貧窮生活の跡を確かめてみたいと考えていた。空襲ですべてを失った私の家族が住んだ家、およそまともな人間的暮らしとはいえない暮らしを強いられた現場であり、私の人生に最もおおきな影響を与えた場所を確認してみたかったのである。

数年前にこのまちを訪ねたとき、この建物はまだ残っていた。家を失った家族に用意された急造の掘立て小屋同然の4軒長屋である。すでに取り壊されているものと思っていたのに、まだ人が住んでいた。私の住んでいた家は隣の家を加えて2階が増築され、窓枠その他はサッシュで仕上げられていたが、地形と雰囲気はそのままだった。その奥にはかつての長屋の雰囲気がまだ残っており、倉庫に利用されていた。

当時は押し入れ付きの4畳半の畳部屋、小さな台所、物置、トイレ、1畳ほどの板の間、



これがすべてであった。ここに家族7人が住んだのだから、過密ぶりたるや想像を絶するものだった。父が押し入れをつぶして6畳間に広げたので少しは過密が解消されたが、焼け石に水で、隣家の声も物音も筒抜けだった。

1945年の冬はことのほか寒さが厳しく、雪が多かった。立付けが悪いので、隙間から雪が吹き込み、建物は完全に雪に埋もれていた。毎日学校に行く前に近くの井戸に天秤棒でバケツを担ぎ、水をくみに行くのが私の日課であった。私のひ弱な肩が家族のライフラインを維持していたのだった。私の右肩下がりの姿勢と肩こりはこの家事を5年間も続けた後遺症であろうか。天秤棒で歩いた細道もあの時のまま残されていた。

千島町1丁目22番地のこの家に私が住んでいたことをかつての同級生たちも知らない。友だちを招き入れる余地はなかったからだ。いくらかは恥じてもいた。爆撃、焼失を免れた同級生の家と比較して、劣等感を持つのは当然であったろう。君の家に遊びに行きたいといわれたとき、あの頃の私はどのように言葉を濁して答えていたのだろうか。今に続く私の屈折した引っ込み思案の性格は、いくらかはこの時代の体験に影響されているかもしれない。多くの被災家族はこのまちを去り、去れない家族は防空壕や仮小屋に、あるいは消失を免れた親類の家、お寺などに身を寄せていたのだから、あの貧窮状態は私だけではなかったのだと、冷静に判断できるようになったのずっと後になってのことだった。私は寝ることと食事の時以外はこの家にあまりいたくなかった。物理的にも自分の身の置き所がなかったからでもあった。何とかこの家と何もなくなったこのまちから逃れたいと思った。

この建物をバラックと呼んでいた。入居当時からこのように呼んでいたのか、誰が最初に使ったかは確かではないのだが、なんとモダンで逆説的な表現ではないか。英和辞典を引いてみると、バラック (barrack) とは、駐屯兵士 (将校ではない) のための細長い兵舎、そしてそれが転じて粗末な建物、仮小屋という意味に使うという。あの建物に入居してから8年後、仙台の大学に入学した頃には、かつての第二師団駐屯地の跡地にアメリカ占領軍の兵士たちのバラックがまだ残っていた。バラックの本当の形を初めて自分の目で確認して、バラックとはいいながら私の場合とは似て非なるものであることを実感した。かつて私の住んだ長屋はバラック以下の非人間的なものだった。

2005年夏、スリランカに前年12月の津波被害義捐金を持参した時、海岸沿いに多くの罹災者の仮住まいを見た。とても人間が住むとは思われない仮小屋であった。物置ともいえない建物であった。かつての私のバラックを



思いだし、彼らがこの貧窮からどのようにして逃れられるのかを考えさせられた。私の家族の場合、父ははるばる礼文島まで出稼ぎに行っていて必死に働いた。郷里にはもう仕事らしい仕事はなかったからだ。父のおかげでなんとか小さいながら家らしいものができ、バラック暮らしから5年かかって脱出できた。スリランカの人びとは彼らの仮小屋から脱出できただろうか。

私のバラックは消えていた。建物はすべて撤去され、雑草の生い茂る細長い土地に変わっていた。私は突如感傷的な気分襲われた。私の戦後の出発点となった場所、私の戦争に対する憎悪をかき立てた原点、あのまちから逃れたいと切に願った場所が永遠に失われた。この家の前に何度も立って自分自身を考えることはもう出来なくなったのである。考えてみれば、あのような仮小屋が60年以上も残されていること自体が不思議なことであった。あの家も、私の記憶にしか残っていない「すり込まれているはずの風景」に変わったのである。

このまちを離れる前日に、私はもう一度この場所を訪ねた。当時の記念になるものはないかと斜面を探してみた。木くず以外めぼしいものは何もなかった。



その土の独特のにおいに懐かしさを覚えた。私の家族が住んで以来の、あるいは空襲で失われた以前の住人の生活の集積を感じ取った気がした。雑草が生い茂りはじめていた。空襲の翌年、1946年にはこの辺り一帯にアカザが茂った。アカザの茎は太く、背の低い私にはジャングルにも思えた。今生えている雑草もアカザのように見えた。そうだとすれば、何という強靱な生命力であろう。

考えようによってはここは私のあの戦争への憎悪や屈折した心情の出発点であっただけでなく、70歳を超える今に至る私の生命力と活力の源であったような気がする。感傷に浸りながらも、新しい力を得たような気がした。

短 信

1 課題の多さに追いつかぬ筆力

通信第3号の発行は難産だった。昨年11月発行の予定で準備していたのに、体調が思わしくなくずるずると先送りになってしまった。その上、私の体験した過去について書きたいとの願望が強まり、本号にその一部を優先して掲載することになった。次号にも続編を書く予定である。遅れたもう一つの理由は、書きたい課題が次々と登場し、私の執筆能力の限界を超えて收拾が付かなくなったことだ。平易な表現を獲得するという私の願いもまだ実現にはほど遠い。

食品の表示偽装に始まって中国産餃子パニックで頂点に達した「食の安全」問題についても、以前に翻訳をしたりいくつか短いものを書いたことがあるので、書きはじめてみたが、かなり長いものになることが予想されたので、次号に回すことにした。

そもそも食料を製造業の枠組で供給することに無理がある。原料価格の変動が大きく、市場向けの見込み生産はなじまない。また海外依存率が高くなると、中国にとどまらずリスクが高くなる。食のグローバル化、食の工業化の先頭に行く日本が直面するリスクについて、次回に考えてみたい。「地産地消」など東京その他の大都市圏で果たして実現できるのか。外食率の高い現状で、外食産業をどのように規制して内食の比率を高めるといえるのか。いわゆる識

者たちには真面目に議論して欲しいものだ。

製紙業界の古紙混入率偽装が発覚した。啞然とさせられた。食品偽装以上にしでかした企業の罪は重いのだが、企業も政府もそれほど責任を自覚して行動しているようにはみえない。再生紙利用は循環型社会の構築を目指すという国の施策の中核をなすものだっただけに、この偽装発覚を契機に、リサイクルは必ずしも地球環境に対する負荷を削減するものではないことを自覚すべきだ。紙消費量の絶対的削減以外に解決はあり得ない。次回にはこのことも是非書いてみたい。

昨年、ラトヴィア、エストニアに旅をした。そこでの体験を踏まえて「グローバル資本主義と小国」をテーマに書くつもりだったが、まだ自分の頭の中で十分に成熟しておらず、次号以降の課題として残すことにした。

書評・紹介の欄を設けてみたものの、不定期発行では新鮮さを欠くことになる。しかもグローバリゼーションについては外国によい仕事が多く、どうしても外国語文献を取り上げることが多くなる。そうすると、おおかたの人は入手が難しい上、外国語を理解しない人には失礼なことにもなる。この号にもいくつか準備したが、その点についての迷いを解決できる自信がなく、すべて次号送りとした。問題はなぜこの本を取り上げるかについて自分の考えを表現する力がまだ十分に備わっていないことだ。

2 現状を的確に表現する用語をめざせ

「限界集落」について考えたのは、都市に住む私にさえ

日々実感させられる衰微の現実に警鐘を鳴らすためだけではない。現実に真摯に向き合っているとは到底理解できない用語、人間の尊厳を貶めるような用語が安易に責任ある立場の人に利用されることに憤激し、注意を喚起したかったためでもある。

官僚機構から次々とわき上がるように発生する用語には注意が必要だ。またメディアが作って流行らせる用語にも問題が多い。たとえば「格差」「格差社会」という表現がある。いまは誰でも使っている。ところがその意味は人によって違う。貨幣価値で表現される経済的格差などはどの時代にもあったし、一般的にいえば、所得の違いは未来永劫に続く。問題は、絶対的窮乏の現実が問題なのだ。地球規模での窮乏の拡大が問題なのだ。「格差」などという平面的でどのようにも理解できる用語でお茶を濁すことは許されない。

3 私事（わたくしごと）

先日、私は 72 回目の誕生日を迎えた。年男である。12 年前に年賀状を準備していた時には、12 年後に再び子年を迎えられるとはとても予想できなかった。12 年先の子年を果たして健康で迎えられるだろうか。そうなることを切に願っている。

去年は多くの友が私より先に逝った。彼らがもういないことに時々不安を感じる。次に死ぬのは自分だという不安よりも、生きる術を彼らから学ぶ機会が失われたことのほうが、私にとってはつらいことだ。

「暴走老人」「キレル老人」に関する話題がメディアに頻繁に登場する。このテーマの書物も売れているようだ。自分もそのように見られているのではと不安になることもある。まちの人びとの私に対する視線がいつもと違ってきたようにも感じられるのだ。

月に数回程度、散歩を兼ねて食材買い出しにまちにでる。大丸デパートの食品売場から始まって、錦市場を抜け、本屋を覗いて、河原町三条の明治屋で終わるとというのが私のおきまりのコースである。その時のいでたちはと言うと、ボルサリーノの帽子にサングラス、パダゴニアの上着とシャツ、ズボンは先日ヨーロッパで買ってきたジーンズという具合で、自分なりに服装にはこだわっているつもりだ。リュックサックを背負い、買い物袋をぶら下げる。先日出かける前に自分の姿を鏡に映してみた。食材の重みに耐えかねて足もとがおぼつかなくてふらふらと歩む、髭を蓄えた白髪の老人は、どうみても「キレル」人には見えないうらう。いささか自嘲的表現かもしれないが、元気印で活躍するつれ合いには失礼なのだが、配偶者を亡くしたあわれな老人の食材買い出しの姿とでもいうべきか。

声を荒げて自己主張する態度は慎み、対人関係も柔軟に、会話もくどくどと昔話をせぬよう、いつも心がけている。しかし、書くことだけは、対象に熾烈な攻撃を仕掛ける「知的暴走老人」でありたいと願っている。前の戦争を体験し戦後生き抜いてきた「貴重な」存在として声を上げないわけにはいかない。

先日西賀茂の農家で珍しい形状の大根を発見。聖護院大根という。初めて見た。聖護院カブラとまったく見分けがつかない。感激のあまり、料理する前にその大根と記念撮影。大根特有の辛みはなく、甘くて煮物には最高である。食べることでもまだ極めなければならぬことが多い。まだまだ生きて楽しむことがある。

